

紀行文における風景とエロス

——森鷗外の『独逸日記』と王韜の『扶桑遊記』を視野にして——

李 勇華

一 はじめに

日本漢文史において、明治維新以後の一時期は特筆されるべきであろう。幕末から明治初期にかけて、漢字廃止論や漢学からの離れが盛んに唱えられながら、その一方、一八七九年（明治十二年）に「和漢学の復興」が招来されたという奇妙な現象が起ったからである。⁽¹⁾漢詩文に限って言うと、正岡子規が「日本の漢詩界を振はしたのも矢張り後進の青年であつて天保臭氣の老詩人ではない」⁽²⁾と述べたように、明治漢詩はその完成度において、必ずしも江戸中後期の漢詩に負けはしない。

漢学の復興がありえた原因は、明治政府の政策を除き、遠くは寛政「異学の禁」に遡ることができる。日本では「異学の禁」をきっかけに「諸藩のそれらの学問〈元流〉は、〈昌平黌〉であり、各藩校教授を通じて幕府の〈文学〉が全国に波及した」⁽³⁾のである。朱子学が正学に定められると同時に、異学はそれによって排除されたどころか、その位置がかえって確保されたのである。⁽⁴⁾そこで無視できないのは、一八七七年に来日した清国駐日本公使館の何如璋公使と黄遵憲参事官、一八七九年に民間人の身分で日本に来た王韜、一八八三年に『東瀛詩選』を編纂した俞樾などの存在である。

ところで黄遵憲、王韜、俞樾らの近代中国人が明治十二年の「和漢学の復興」とどのような関係にあったのかは本稿では論じないが、黄遵憲と俞樾と同じように、明治日本の漢詩文の世界に深くかかわった王韜の『扶桑遊記』と森鷗外の『独逸日記』を取り上げて、紀行文とはなにかということを考えてみたい。⁽⁵⁾

最近、齋藤希史は前後して『漢文脈の近代』（名古屋大学出版会・二〇〇五年）、『漢文脈と近代日本』（日本放送出版協会・二〇〇七年）などの著書を出して、近代東アジアの漢文世界の全体を捉え直した。それによると漢文脈とは漢詩文を中心にしているものであり、たとえば森鷗外の『航西日記』などの漢文で綴った紀行文が含まれているが、文人の手すさびとして書かれた小説はその周縁的なものと見なされていた。

さらに齋藤希史の定義を敷衍してみると漢文の紀行文のみならず、読み下し体書き替えられた森鷗外の『独逸日記』も漢文脈において捉えられる。このような定義の下で、本稿では細かい相違を問題とせず、近代中国人の渡欧日記、近代日本人の漢文の渡欧日記およびそこから和文に書き替えられた日記という三種類の紀行文を同じ次元で扱ってみたい。

紀行あるいは紀行文という言葉は漢字で表記されているが、日本語式の漢語であり、今日の中国ではあまり使われていない。現代中国語で、それに当たる言葉はいくつかがあるが、遊記はそのなかのひとつである。⁽⁶⁾ 日記は必ずしも紀行文のことと意味するとは限らないが、中国と日本では古代から日記の体裁をよそおって日次に書かれた紀行文が多かった。陸遊の『入蜀記』や紀貫之の『土佐日記』などがその代表作として挙げられる。

『土佐日記』は日記の文体において漢文から和文への転換点にある作品として、近代日本では国民文学の代表作として高く評価されたが、実は漢文のテキストから翻訳されたものである。⁽⁷⁾ 明治時代に入り、たとえば森鷗外には前述の『航西日記』という漢文の日記もあれば、『在徳記』という漢文の日記から書き替えられた『独逸日記』という和文の日記もある。そのほかに、成島柳北の『航西日乗』などの漢文の日記から読み下し体で和文に書き替えられた紀行文がある。近代日本で書かれた和文の『航西日乗』であっても、漢文の『航西日記』であっても、いずれも漢文のテキストに深くかかわっている

ものである。それらと同種のもので挙げられるのが近代中国人の渡欧日記である。

そのために本稿では、まず近代中国人と日本人の渡欧日記の関連を簡単に触れてみたい。その次に、梁啓超の『夏威夷遊記』（ハワイ遊記）を通して間接的に紀行文とはなにかということを考えてみる。その上で王韜の『扶桑遊記』と森鷗外の『独逸日記』について分析して、紀行文の外見を「散文＋韻文」、その中身を「風景＋エロス」と図式化してみたい。論の終わりに、今日では近代初期の中国人と日本人の紀行文から何が考えられるのかということに触れてみる。

二 近代中国人と日本人の渡欧日記

近代中国人と日本人の渡欧日記を考察するには、鐘叔河編の『走向世界叢書』と久米邦武編の『米欧回覧実記』から始めるべきであろう。しかし、紀行文とはなにかということを考える際、近代中国人と日本人の渡欧日記の全体像より、むしろ近代世界に出会いつつ、前近代と深くかかわった、「保守主義者」とみえた知識人のテキストを分析したほうがもっと有効だと思われる。彼らの渡欧日記を読み比べると、近代に入ってから以後、この世から消失しつつあった紀行文の性格を明確に理解できる。

一八六六年に欧州各国の歴遊の途について斌椿は、清政府によって正式に派遣された最初の知識人である。翌年の一八六七年に香港に逃亡した王韜は、民間人の身分でイギリスへの旅を始めた。この二人は渡欧によってそれぞれ『乗槎筆記』『漫遊隨錄』などの紀行文を残した。斌椿は紀行文には漢詩を交えなかったが、別に『海国勝遊草』と『天外帰帆草』という漢詩集をまとめた。

森鷗外はドイツに行く途中に成島柳北の『航西日乗』を座右において漢文の『航西日記』を綴ったとされている。後にまた触れるが、『航西日記』の中で香港という地名の由来についての王韜の説を弁駁したことが示しているように、森鷗外は

渡欧する前に欧米およびイギリスに占領された香港に関連する書籍を網羅して読んだ可能性がある。

それはともかく、斌椿の『乗槎筆記』が王韜と成島柳北に読まれ、成島柳北の『航西日乗』⁽⁸⁾と王韜の『香港略記』が森鷗外に読まれたということから見れば、斌椿、王韜、成島柳北と森鷗外の四人のテキストにおいて、クリステヴァが主唱した間テキストの問題が歴然と存在する。言い換えればテキストの受け手にとって、このような近代中国と日本の紀行文の間には単に影響関係があるのみならず、今日のわれわれにとつて、このようなテキストから様々なことを見出すことが可能なのである。それは近代中国人だけの渡欧日記、あるいは近代日本人だけの渡欧日記を通してなかなか到達できるところではない。

さて、この四人の渡欧時期はそれぞれ異なるが、香港からマルセーユまでの航路は同じであり、おおよそ四十日ほどであった。そして船がサイゴンやシンガポールなどの港に着くと、石炭や食用の水などを補充する。その合間を利用して、船客が上陸して観光したりする。それゆえに彼らの日記には似ている記述が多く見られるのである。たとえば、シンガポールとマレーシアなどの港には次のような技を持っている子供がいた。

① 斌椿『乗槎筆記』

查新嘉坡古名息力，與麻六甲旧皆番部，属暹羅，今則咸稱為新嘉坡。小船剝木為之，銳其兩端。小兒鼓棹啁啾。客皆以銀錢擲海中，則群躍沒入，少頃握錢出。蓋洋艘至，必以此為戲。故兒童見舟，皆拍手笑樂，如拾韓嫣彈丸也。車制與安南小異，御者亦皆麻六甲人。肌黑如漆，唇紅如血，首纏紅花布則皆同。（中略）。歸舟，有頂帽補服來謁者，都司職銜，閩人陳鴻勳，貿易居此。⁽⁹⁾「查スルニ新嘉坡（シンガポール）ノ古名ハ息力ナリ、麻六甲（マラッカ）ト与ニ旧ト皆番部ニシテ、暹羅（シャム）ニ属シ、今ハ則チ咸稱シテ新嘉坡ト為ス。小船木ヲ剝リテ之ヲ為ス、其兩端ヲ銳クス。小兒棹ヲ鼓シテ啁啾シテ、客皆銀錢ヲ以テ海中ニ擲ズレバ、則チ群躍シテ没入シ、シバラクシテ錢ヲ握リテ出ヅ。蓋シ洋艘至レバ、必ズ此ヲ以テ戲ト為ス。故ニ兒童舟ヲ見レバ皆手ヲ拍チテ笑樂シ、韓嫣ノ彈丸ヲ拾フガ如シ。車制ハ安南（ベト

ナム）ト小シク異リ、御者モ亦タ皆麻六甲人ナリ。肌黒クシテ漆ノ如ク、唇紅クテ血ノ如シ。首ニハ紅花布ヲ纏ヒテ則チ皆同ジ。（中略）。歸舟、頂帽補服シテ來謁セル者有リ、都司ノ職銜、閩人陳鴻勳、貿易シテ此ニ居リ。」

②王韜『漫遊隨錄』

余造舵樓、憑欄眺望、見水中拍浮者、皆群小兒也。齒白唇紅、其肉黑幾如漆。見客嬉笑乞錢。所駕小舟、剝木為之、首尾兩槳、掉之如飛。偶以兩足踏船、翻身落水中。船亦隨覆、出沒波浪中、狎之如鷗鶩。洋客競投以銀錢、群于水中捫得之、高擎其手、舉以示客。象罔求珠、無此靈捷也^⑩。「余舵樓二造り、欄ニ憑リテ眺望シ、水中ニ拍浮セル者ヲ見ル、皆群小兒ナリ。齒白クシテ唇紅ク、其ノ肉黒クシテホトンド漆ノ如シ。客ヲ見レバ嬉笑シテ錢ヲ乞フ。駕スル所ノ小舟ハ木ヲ刳リテ之ヲ為シ、首尾兩槳、之ヲ掉シテ飛ブガ如シ。偶ニ兩足ヲ以テ船ヲ踏ミ、翻身シテ水中ニ落ツ。船モ亦タ隨ヒテ覆ヘリ、波浪ノ中ニ出沒ス、之ニ狎レルコト鷗鶩ノ如シ。洋客競ヒテ投ズルニ銀錢ヲ以テスレバ、水中ニ群シテ之ヲ捫得シテ、高ク其ノ手ヲ擎ゲ、舉ゲテ客ニ示ス。象罔ニ珠ヲ求メシムルモ此ノ靈捷無キ也。」

③成島柳北『航西日乗』

六時港ニ達ス赤道ヲ距ル一度十七分此港ハ新港ト名ヅク人家多カラズシテ石炭庫多シ（中略）港内ノ兒童皆裸体ニテ瓜片様ノ小舟ニ乘リ來タツテ文具ノ類ヲ売ル客小銀錢ヲ水中ニ投ズレバ跳テ水ニ没シ之ヲ攫シテ浮ブ蛙兒ト也似タリ土人皆黒面跣足ニシテ紅花布ヲ纏ヒ半身ヲ露ハス^⑪

④森鷗外『航西日記』

達星嘉坡。所謂新港。舟接埔頭。如塞棍港。沿岸多煤庫。有兒童乘舟來。請投銀錢於水中。沒而拾之。百不失一。舟狹而小。如剝瓜。嶺南雜記云。蛋戶入水不沒。每為客泓取遺物。亦此類^⑫。「星嘉坡（シンガポール）ニ達ス。所謂新港ナリ。舟ノ埔頭ニ接スルハ、塞棍（サイゴン）港ノ如シ。沿岸ニ煤庫多シ。兒童ノ舟ニ乘リテ來タル有リ。銀錢ヲ水中ニ投ゼンコトヲ請フ。沒シテ之ヲ拾フ。百ニ一モ失ハズ。舟ハ狹クテ小サク、剝瓜ノ如シ。嶺南雜記云フ、蛋戶水ニ入り

テ没セズ。毎ニ客ノ為ニ泗ギデ遺物ヲ取ルト。亦タ此ノ類ナリ。」

右の引用には成島柳北だけは漢文の読み下し体で文章を綴っている。それにもかかわらず簡単に漢文へ復元できる。たとえば「六時達港。距赤道一度十七分。此港名新港。人家不多。多石炭庫」云々。森鷗外の『独逸日記』もそうであるが、成島柳北の紀行文が簡単に漢文に復元できるのは文章に四字成句が多く使われているのが一因である。

それはさておき、右の引用では船のことを描くのに用いられた動詞「刳」が際立っている。成島柳北だけはこの言葉を使わず、その代わりに「瓜片様」で船を表現した。森鷗外の文章には動詞の「刳」と船を形容する「瓜」のいずれも使われている。

言葉遣いについて前述の通りであるが、斌椿と王韜は「韓嫣彈丸」「象罔求珠」などの古典をもって子供の技を喩え、それに対して成島柳北は簡単に「蛙児」という分かりやすい言葉で子供のことを形容しただけである。この三人と違って、森鷗外は『嶺南雜記』という資料をもって客観的にこのような子供の歴史的由来を説明した。この説明を裏付けするのは引用文の②である。先ほどの引用では王韜だけがシンガポールではなく檳榔嶼（マレーシア）の風景を記述した。これによって、当時潜水して小銭を拾うという技を持っている子供はシンガポールだけで見られる風景ではなかったことが分る。

漢文の文章は古典の使用によって文章の綾が倍増され、文章の格調が高くなることは間違いないが、それによって現実を直視しての分析を怠り、書き手の恣意的な発想を放縱させるおそれがある。⁽¹³⁾ところが森鷗外が批判的に中国人の漢文テクストを読むことができたのは単に彼が近代科学者の眼力を持っていただけではなく、欧米の語学力にも負うところが大きい。この点については、香港という地名の由来をめぐって森鷗外と王韜の説明の違いを見てみよう。

王韜は一八六二年（同治元年）十月十一日、上海から香港に避難してきて、その三年後に『香港略論』という文章を綴った。

山上多澗溪，名泉噴溢，活活声盈耳，味甘冽異常。香港之名或以此歟。⁽¹⁴⁾「山上二澗溪多ク、名泉噴溢シ、活活タル声ハ

耳ニ盈チ、味ハ甘冽ニシテ常ト異ナル。香港ノ名ハ或イハ此レヲ以テスル歟。」

香港の歴史を紹介する文章で香港の清冽な水に触れた王韜は、香港の盗賊、蛋民のことをよく知っていたにもかかわらず、香港という地名についての説明はあくまでも「香」という字面に止まり、いわゆる「望文生義」のそしりを免れがたい。

これに対し、森鷗外は『航西日記』でポルトガル語から香港という地名の由来を説明しながら王韜の説を弁駁した。

盖香港之名。原出葡語。盜賊之義。清人填以今字。王紫詮曰。山上多泉。甘冽異常。香港之名或以是歟。紫詮不識葡語。故有此說。⁽¹⁵⁾「盖シ香港ノ名ハ、原葡語ヨリ出ヅ。盜賊ノ義ナリ。清人今ノ字ヲ以テ填ス。王紫詮曰ク、山上ニ泉多

ク、甘冽ニシテ常ト異ナリ、香港ノ名、或イハ是ヲ以テスル歟ト。紫詮ハ葡語ヲ識ラズ、故ニ此ノ說有リ。」

森鷗外の指摘はまさに肯綮にあたり、アヘン戦争以後の中国の近代化のアキレス腱を浮き彫りにしている。というのはアヘン戦争以後、中国人は日本人より早く西洋に出会ったし、早く渡欧したが、全体的にいうと日本人ほど西洋の言葉を積極的に学ばなかったということがあるからである。たとえば、王韜および王韜より早く宣教師に雇われた中国人は殆どの時間を宣教師の翻訳を添削するために費やしたが、『ターヘル・アナトミア』を訳した杉田玄白たちのように完全に西洋の言葉から翻訳を行なうことは彼らの手によつてはなされなかった。王韜を含めて、宣教師と共に一緒にバイブルなどを翻訳した中国人はあくまでも脇役のような存在にすぎなかった。

それはともかく、近代中国人の渡欧日記が成島柳北や森鷗外などの近代日本人に読まれ、渡欧日記を記すときに参考とされた可能性は否めないが、森鷗外のように、近代科学、西洋の語学などの角度から批判的に読まれたことを見逃してはならない。

三 梁啓超の『夏威夷遊記』

梁啓超にとって、王韜たちの渡欧日記には因襲とともに擯斥されるものがあまりにも多かったと言えるかもしれない。王韜と同じく、梁啓超も近代中国の知識人として早くに欧米を歴遊したが、彼が残した『夏威夷遊記』と『新大陸遊記』は斌椿や王韜の欧遊日記とは随分性格が異なっている。このことによつて間接的に従来の紀行文とはなにかということが理解できる。では、梁啓超の『夏威夷遊記』にある一段を見てみよう。

昔賢旅行、皆有日記。因效其体、每日所見所聞所行所感、夕則記之、名曰『汗漫錄』、又名曰『半九十錄』。以之自証、且貽同志云。其詞蕪、其事雜、日記之体宜然也。¹⁶「昔賢ノ旅行ニハ、皆日記有り。因リテ其ノ体ニ效ヒ、毎日ノ見ル所、聞ク所、行ク所、感シル所ヲ、夕ベニハ則チ記ス。名ヅケテ『汗漫錄』ト曰フ、又タ名ヅケテ『半九十錄』ト曰フ。之ヲ以テ自ラ証シ、且ツ同志ニ貽ルト云々。其ノ詞ハ蕪、其ノ事ハ雜、日記ノ体ハ宜シク然ルベキ也。」

右の引用によると、中国では古代から殆どの紀行文は日記を装って書いたということがわかるのみならず、旅によって残した日記は「自証」（備忘録）として使われる場合もあれば、お土産物として同好の士に贈られる場合もある。八股文などに比べ、使う言葉および記述された内容が蕪雜なので日記という体裁を取るのが適当である。日記では、書き手は八股文と比べ比較的自由に書くことができ、形式やルールなどを重んじる作文より、日記の方が書き手の個性が見えるのである。「五四運動」の巨匠である周作人が明清知識人の日記、日記の体裁をとった紀行文を集めたのは、日記に記載されている「瑣屑」な内容にこそ書き手の個性がよく表われているからである。周作人に言わせると、日記には「做作」（作為的で、不自然である）の要素が薄いのである。¹⁷

梁啓超は『夏威夷遊記』に、一八九九年十二月から一九〇〇年一月一〇日までの日々の出来事を記したが、以下の二点において、従来の紀行文に異を唱えた。一つは紀行文に漢詩を交える形をやめたことである。理由は紀行文に交えた漢詩は月

並みなものが多く、あくまでも「鸚鵡名士」の遊びに過ぎないからである。そのような漢詩には作為的なところが多く、個性を表すところが少ないということが推測できよう。

いうまでもなく、梁啓超の趣意は漢詩そのものを完全に排斥することではなく、それによって新時代にふさわしい漢詩とはなにか問うて、「詩界革命」を引き起こすことにあったのである。漢詩を作るには「新意境」、「新語句」そして古人の「風格」という三つの条件が揃わなければ「詩界革命」は出来ない、梁啓超は『夏威夷遊記』に述べている。宋と明の詩人は印度仏教の「意境」と「語句」を詩に取り入れることによって「詩界革命」が出来たが、今日の詩人は「新意境」と「新語句」を日本や欧米諸国に求めることができる。これこそ詩人の詩であり、それができる詩人は詩王の称号をもらえる、と梁啓超は力説している。⁽¹⁸⁾そして新時代の詩人として梁啓超によって高く評価されたのが黄遵憲である。

梁啓超はまた、紀行文に風景の記述をすることに反対している。その理由について梁啓超はアメリカを回った『新大陸遊記節録』に次のように書いている。

中国前此遊記、多紀風景之佳奇、或陳宮室之華麗、無関宏旨、徒災棗梨、本編原稿中亦所不免。今悉刪去、無取耗人目力、惟歷史上有関係之地特詳焉。⁽¹⁹⁾「中国ノ此レ二前ツ遊記ハ、多ク風景ノ佳奇ナルヲ紀シ、或イハ宮室ノ華麗ナルヲ陳ベ、宏旨ニ関セズ、徒ラニ棗梨ニ災フ。本編ノ原稿中ニモ亦タ免レザル所アリ。今ハ悉ク刪去シ、人ノ目力ヲ耗スヲ取ラズ。惟ダ歷史上ニ関係アルノ地ノミ特ニ詳カニス。」

梁啓超によって公開されたのは原稿の『新大陸遊記』ではなく、その節録なのである。彼自身が言っているように、この遊記を公開する際に、原稿にある風景の記述を悉く削除したのである。梁啓超を含め、胡適などの近代知識人は公の場合では白話文を唱えながら、私の日記や手紙のなどを記すとき、依然として古典中国語を使っている。近代に入ってから以降、このような知識人にとっては〈公〉と〈私〉の区ざあい、〈公〉から〈私〉へのシフト、あるいは〈私〉から〈公〉へのシフトなどの問題を見逃すことはできないであろう。

また、梁啓超は公開された『新大陸遊記節録』のなかに漢詩を入れようとしなかったのみならず、漢詩を作ることそのものにも抵抗した。それにもかかわらず普段はあまり漢詩を作らない彼は、横浜を離れてまだ日が浅いうちに三十首ほどの漢詩を作った。このことに梁啓超は自責の念を抱き、「鸚鵡名士」にならないように「戒詩」を誓うに至った。

このように、梁啓超の紀行文、厳密にいえば公に向って公開された紀行文によって、従来の紀行文の特徴が間接的に理解できる。つまり、紀行文とは外見としては散文に漢詩を交えるものであり、内実としては風景を記述するものであったのである。

四 『扶桑遊記』 についての評価

一八七九年に来日した王韜は、日本にきた最初の中国文人として中村正直たちに褒めそやされた。そして、この旅を記した『扶桑遊記』が、いち早く栗本錦雲によって報知社から出版された。ただし王韜自身の話によると「海防、兵政、軍艦、営壘」などの内容は悉く削除され、「載酒看花」の内容さえ沈梅史によって縮められたところが多かったために、いつの日か再刊しようと考えていたようである。⁽²⁰⁾

それにしても、報知社版の『扶桑遊記』にはエロスに関連する内容があまりにも多い。東京にいる間、王韜はほぼ毎日旧幕府に関係の深かった知識人の設けてくれた宴会に参加し、漢詩の唱和をしたりして忙しい日々を送った。そして、ほぼ毎晩妓楼に遊んで、遊女と一緒に送る夜が多かった。

中国近代史において王韜はよく知られている人物であるが、黄遵憲などに比べ、あまり研究されていない。『扶桑遊記』についても研究は多くないが、それは同書にはエロスに関する内容があまりにも多く記述されたため、一部の読者の失望を招来したことによるようである。この書物について早く、しかも詳細に分析したのは木下彪の『明治詩話』であろう。しか

しその研究の趣旨は、『扶桑遊記』そのものを研究するというよりは、それを通して明治社会の一端を明らかにすることにあった。

ところで、紀行文としての『扶桑遊記』を考えるにあたって、木下の研究は大いに参考となる。木下からみれば、王韜と日本人との漢詩唱和はさほど高く評価されるべきものではない。王韜の好色には直接にふれてはいないが、それを仄めかして「其の人物に至りては固より道ふに足らず」と断言している。木下にとって評価できるのは『普法戦記』の作者としての王韜であり、積極的に黄遵憲の『日本雑事詩』を出版して新学を鼓吹した王韜である。結局、木下は「王紫詮之繙繹事業、無精神無条理、毫無足称道者」⁽²¹⁾「王紫詮ノ繙繹事業ハ、精神無ク条理無シ、毫モ称道スルニ足ル者無シ」という梁啓超の酷評を引いて論を締めくくった。P.A.Cohenの研究では王韜を「沿海型改革家」(Littoral reformers)として再評価したが、

「新学」という欧米を基準にしているの見方はかつてのままである⁽²²⁾。

勿論、ここであえて『扶桑遊記』を取り上げて好色の王韜、晩年にアヘンを飲んでいた王韜を評価するつもりは全くない。あくまでも『扶桑遊記』を通して紀行文とは何かを明らかにし、その内実として風景のほかにエロスにも深くかわっていることを示すためである。そのみならず、風景とエロスを視角にすることによって、王韜の旅の全体および『扶桑遊記』の構造がはつきりと見えてくる。

王韜は一八七九年閏三月九日(陰暦、以下も同じ)に上海を離れて日本への旅に立った。十二日に長崎、十四日に神戸、十七日に大阪、二十日に京都、三月の二十五日に横浜に着いた。この日から王韜と日本知識人の漢詩唱和が始まったのである。先ほど触れたように、そのなかに旧幕府に勤めた人が多く、明治時代に入って以後、失意の文人となり、王韜の悲運に通じるが多かった。失意の心を慰めるために、酒色の生活を求めたのであろう。

王韜の東京での日々の生活は酒、風景とエロスからなる三位一体のようなものとして捉えることができる。王韜の早期の日記を紐解くと分るが、彼は若い頃からさかんに「校書」を訪れたり、酒を飲んだりしていた。それに「啜茗」を加えるこ

とができる。王韜は東京で増田貢に「好酒好花兼好色、能書能畫又能詩」という漢詩を贈ったが、好色において決して増田貢に劣らない。そのために彼は人に人柄を疑われるに至っている。

知命之年尚復好色、齒高而興不衰、豈中土名士從無不跌宕風流者乎？「知命ノ年尚復タ好色、齒高クシテ興衰ヘズ。豈中土ノ名士ハ從テ跌宕風流ナラザル者無カラン乎？」

と聞かれると、王韜は信陵君、『国風』、『離騷』などの歴史上の例を並べてこのように自己を弁護した。

嗜酒好色、乃所以率性而行、流露天真也。如欲矯形飾節、以求悅於庸流、吾弗為也。（中略）世但知不好色之偽君子、而不知好色之真豪傑、此真常人之見哉。⁽²⁴⁾「酒ヲ嗜ミ色ヲ好ムハ、乃チ性ニ率ヒテ行ヒ、天真ノ流露スル所以ナリ。形ヲ矯メテ節ヲ飾リ、以テ庸流ニ悅ヲ求メント欲スルガ如キハ、吾ノ為サザルコト也。（中略）世ハ但ダ好色ナラザルノ偽君子タルヲ知ルノミニシテ、好色ノ真豪傑タルヲ知ラズ、此レ真ニ常人ノ見ナルカナ。」

たしかに自分の酒色に沈湎する生活をそのまま認めるのは偽善とはいえないが、しかしそれを天真の流露として、そのまま評価されるかどうかは疑問である。そうするならば欲望の氾濫を招来するのは必至であろう。王韜の好色は個人生活の問題なので、これ以上立ち入らない。しかし、『扶桑遊記』という紀行文においてエロスは重大な要素の一つであり、それが具體的にどのように記述されたのかは問題にするべきであろう。

五 『扶桑遊記』のエロス

報知社版の『扶桑遊記』は上中下という三巻からなっている。地域的には大体長崎―横浜、東京、日光に分けられ、それぞれ上巻、中巻、下巻に当たる。尚、記述された内容からみると、三つの地域は主としてエロス、風景とエロス、風景とのように整理できる。

江戸中後期に流行していた文人趣味はさることながら、風景とエロスの揃っている旅は文人にとってあこがれの世界である。王韜は文人として、旅のクライマックスを東京で迎えたと言っても差し支えない。それについて王韜が長崎にいる余元眉に寄せた手紙を見てみよう。

日本文士來訪者、戸外屢滿。樽疊之開、敦槃之會、無日無之。或有時追陪兩星使後、賦詩言志、東遊之作、頗有豪氣。日本諸文士皆乞留兩閱月、願作東道主、行李或置、供其困乏。日在花天酒地中作活、幾不知有人世事。⁽²⁵⁾「日本文士ノ來訪セシ者ハ、戸外ニ屢滿チタリ。樽疊ノ開、敦槃ノ會、コレ無キ日ハ無シ。或イハ時ニ兩星使ノ後ニ追陪シ、詩ヲ賦シ志ヲ言フ有リ。東遊ノ作ハ頗ル豪氣有リ。日本ノ諸文士ハ皆兩閱月留ルコトヲ乞ヒ、東道主ト作ルコトヲ願ヒ、行李或イハ置シケレバ、其ノ困乏ニ供ス。日々花天酒地ノ中ニ在リテ活ヲ作シ。幾下人世ノ事有ルヲ知ラズ。」

「花天酒地」という言葉が如実に物語っているように、東京にいる王韜の日々は酒色に沈湎する生活で終わった。畢竟、このような生活は日常生活とかけ離れるので、人に夢うつつを感じさせるものであり、一旦長くなると人に無常の念を生じさせてしまう。それで王韜はこの手紙のなかに続けて「此來深入花叢中、而反如見慣司空、味同嚼蠟。釋迦牟尼大徹大悟」⁽²⁶⁾「此ニ來タリテ花叢ノ中ニ深入シ、而シテ反テ見慣司空ノ如ク、味ハ蠟ヲ嚼ムニ同ジ。釋迦牟尼ノ大徹大悟ナリ」としたため、東京を離れて故郷に帰りたい気持ち之余元眉に披露した。

さて『扶桑遊記』では、東京の「花天酒地」という風景とエロスが揃っている生活が具体的に漢詩によって詠まれている。代表的な例として隅田川を詠む「墨川之水清且漣、墨川之姝嬌且妍」⁽²⁷⁾「墨川之水ハ清ナリ且ツ漣ナリ、墨川之姝ハ嬌ナリ且ツ妍ナリ」という一句を挙げられる。この背景のなかで王韜は『芳原新詠十二首』を作った。

『扶桑遊記』では殆どの漢詩は唱和の作として書かれたものであるが、『芳原新詠十二首』はそれと異なつて、王韜一人で作ったものである。「十萬名花齊待汝、人生何再覓封侯」「十萬ノ名花齊シク汝ヲ待ツ、人生何ゾ再ビ封侯ヲ覓メンヤ」、「黃金收得高於屋、買盡東京十萬花」「黃金收メ得テ屋ヨリモ高シ、東京ノ十萬ノ花ヲ買ヒ尽サン」などの「豪氣作」をもつて

エロスの絶頂が歌われた。

もし『芳原新詠十二首』から『扶桑遊記』を俯瞰すれば、紀行文としての『扶桑遊記』の構造のみならず、王韜の旅の全体がはつきりと分る。王韜は横浜に着くまで、長崎、神戸、大阪と京都の各地では現地の中国人に伴われて、各地の色町などを回ったのみならず、湊川などの風景をも見たが、エロスの面においてはやはり東京の吉原に及ばず、景色の面においては日光にかなわないと感じたのである。

王韜にとって日光の景色は綺麗は綺麗であるが、エロスの面ではもの足りなかった。なぜ日光はエロスが希薄かというところ、そこは神様の住んでいるところなので、娼妓によって汚れるおそれがあるからであった。

自古河駅始、每駅皆有娼樓、無色妓則以歌妓代。惟日光町一帶獨無佳人。蓋是山從古以來、傳為神仙所窟宅、故所在莊嚴潔淨、以示崇敬。是不知藍橋覓路、玉杵乞漿、胡麻飯熟、劉阮曾來、神仙眷屬、自古有之、況于世人乎哉？〔古河駅ヨリ始り、駅ゴトニ皆娼樓有り。色妓無ケレバ則チ歌妓ヲ以テ代ル。惟ダ日光町ノ一帶ノミ佳人無シ。蓋シ是ノ山ハ古ヨリ以來、神仙ノ窟宅スル所ト為ルト傳ヘ、故ニ在ル所ハ莊嚴潔淨、以テ崇敬ヲ示ス。是レ藍橋ニ路ヲ覓メ、玉杵漿ヲ乞ヒ、胡麻飯ヲ熟シ、劉阮曾テ來ルヲ知ラザレバナリ。神仙ノ眷屬、古ヨリコレ有り、況ンヤ世人ニ於テヤヤ？〕

王韜は中国の古典をふんだんに使って、そもそも景色のいいところにエロスは欠かせないと説明した。いうまでもなく、これは中国を中心にしての見方である。このような眼差しで、王韜はまた日本に行つてそのまま残つた明の移民、日本に伝存し中国では散逸した中国古代の楽器曲や図書などを見ていた。

ところで、中国の古典をもつて女性を美しく形容しても、エロスにおける言葉遣いは「流鶯」、「遏雲」、「流波」などによつて締めくくられるように、千篇一律なところがあると言わざるを得ない。それについては「表一」を参照されたい。日本の旅では、誰よりもこのような言葉遣いにうんざりしたのは王韜自身であり、したがつて「梅史、漆園席間^{有詩}、余以小巫見大巫、興味索然、不能継声」〔梅史・漆園ハ、席間ニ詩有り、余ハ小巫大巫ヲ見ルヲ以テ、興味索然トシテ、声ヲ続

ケルコト能ハズ。」と『扶桑遊記』に記したのである。⁽²⁹⁾

このような問題はこれから論じる森鷗外の『独逸日記』にもある。だからこそそれによって従来の紀行文の内実は「風景＋エロス」という構造を有しているということがわかる。

六 滞独時代の森鷗外宛の手紙

梁啓超の『夏威夷遊記』を分析するときに触れたように、そもそも紀行文は公開を前提とするものである。森鷗外は渡欧によって『航西日記』、『在徳記』、『隊務日記』と『還東日乗』などの漢文日記を記したが、『在徳記』だけは公開されなかった。その理由について前田愛などが指摘したように、『在徳記』には小説『舞姫』のヒロインを思わせる内容があるからである。⁽³⁰⁾ 森鷗外の独逸留学の生活を考証する研究にとつては原稿の『在徳記』でなければ説明できないところがあるが、紀行文の性格を明らかにしようとする本稿にとつては、『独逸日記』だけでもさほど問題とはならない。というのは、『在徳記』から浄写された『独逸日記』は依然として従来の紀行文の外見と内実が揃っているからである。言い換えれば、書き替えられるとき、具体的な内容が削除されたり、増やされたりした可能性はあるが、紀行文の形式はそれによって変わっていないのである。⁽³¹⁾

ただし『航西日記』に比べ、『独逸日記』のほうは漢詩の数があまりにも少ない。『舞踏歌』などを除いて、『独逸日記』の後ろの「附録」に添付された「詠柏林婦人七絶句」ぐらいしか見えない。「詠柏林婦人七絶句」は森鷗外の原作ではないという説がある。⁽³²⁾ しかし、それがあつてこそ『独逸日記』は紀行文という外見を全うすることができる。

さて『独逸日記』の内容を分析する前に、森鷗外が独逸に留学している間に、家族から来た手紙によって、『在徳記』という漢文紀行文の世界を想像し、どのような文学空間であつたのかを考えてみよう。

森鷗外は、横浜を離れて渡欧の旅にたったその日から、ほぼ週に一回ぐらい家族から手紙が届く。その中に、父は候文で自分の仕事、社交などのことをしたため、詳しい内容は篤次郎の手紙に譲る。弟の篤次郎の手紙には日本社会の流行、学校の勉強、隣の女の子の品定めなどの、多岐に渡る内容が書かれている。そして妹の喜美子はまだ女学校に通っているので、手紙に和文で学校の勉強などを報告し、和歌をよくいれていた。

篤次郎の手紙および『独逸日記』に記載されている内容によって、ドイツにいる森鷗外のエロスの世界を究明することは不可能である。森鷗外はよく留学生と一緒にコーヒーを飲みに行ったが、喫茶店にいる娼婦と性的関係まで結んだかどうかの記述は見当たらないからである。それよりもむしろ「花柳社会」から距離を取った森鷗外の姿が篤次郎の手紙に詳しく書かれている。

海外留学生多シト雖モ多クハ花柳社会ニ沈湎シソノ学資モ娼婦ノ一笑ヲ買フニ抛テ顧ミサルニ家兄独卓然トシテ此挙アリ彼外人ノ目ヲ驚シムルニ足ルノミナラズ留学生輩ヲシテ又タ自ラ顧マシムルニ足ラン世ニ卓絶スルト事業著述ヲ為ントスルニハ万巻ノ書ヲ観破セザル可ラズ加フルニ雨牕雪夜繙テ以テ無聊ヲ慰スルニ足ルオヤ一家感服ノ外ナシ⁽³³⁾

右の引用によると、海外の留学生に森鷗外のように花柳社会に遊ばず、寂しい時に本を読んだりしているような健全な学生があまりにも少なかった。それはあくまでも森鷗外の個人の生活の問題なのでこれ以上の立ち入りを控える。

では、森鷗外と弟の篤次郎にとつてのエロスをどのように考えればいいのか。そこで明清小説などのテキストによって支えられたエロスを考える必要があると思われる。それについては篤次郎の「通新町の三人娘」の品定めを見て見よう。

秋貞ハ春過テ夏ニナレドモ未ダソノ偶ヲ得ズ父親ト唯兩人ニテアリ先日腫物ノ為ニ少シク面容ヲ損セシガ再ビ秀美ヲ呈シ双睛ノ秋波漸佳ナリソノ隣ニ荒物屋アリコノ娘子ハ固千住ニテ余庭前ノ対ナル家ニ居シ（中略）未ダ二八ノ少女ニシテ兩鬢低クシテ肩ニ低レ玉顔（御大層）粉セズシテ自ラ清シ（中略）又一人ハ足袋家ノ少女ニシテ巨眼圓顔未ダ美ト称ス可アラネドモ又良家ノ処女タルヲ以テ多少ノ姿色アリ。⁽³⁴⁾

秋貞はまだ結婚の相手がみつかっていない。一時に腫れ物のために顔の様子が醜くなったがまた綺麗になったとか、その隣の女の子はそんなに化粧しなくてもみずみずしい顔をしているとか、足袋屋の少女はそんなに綺麗ではないが、良家の少女としてそれなりに評価できるところがあるとかという内容である。すでにフランス、ドイツの美人を見た森鷗外にとつて、このような「郷里嬢の噂」は「実ニ下ラネド又旅中ノ一笑トモナラント無益ノ筆ヲ走ラス已」と篤次郎が手紙のなかに書いている。

この手紙は全体として簡単に漢文調の文章に復元できるのみならず、「娘子」、「秋波」などの言葉が示しているように、篤次郎の手紙には才子佳人小説などの漢文のテキストによく使われた言葉をもって、目の前のエロスの世界を描いているという特徴が明らかに見える。そのみならず、そのようなテキストによって篤次郎は目の前の世界にたいする想像を膨らませるのである。それに気付いた篤次郎は「三娘ノ家相對シ年齒相適スルヲ以テ祭礼ノ朝縁日ノ夕互ニ其研^マヲ戦ハスト云フ」と書いた後、括弧に「ドウカ、余計ナ想像」という内容を書き添えたのである。

一方、篤次郎の森鷗外に寄せた手紙に漢文テキストに頼つての風景描写もよく見られる。

遊客ノZordpotトシテ歩ヲ廻スハ百花園ナリ某商旧主ヨリ贖テ二州嶋ト名ク堤左ノ田圃ヲ埋メテ築キシモノニシテ大水ノ虞ナキニアラネドマタ一個ノ好遊場ナリ四囲各三百歩ナル可シ觀場ノ券値僅ニ二錢（随分高イ共進会ハ三錢ダヨ）園ノ右左ニ小門ヲ設テ出入ニ便ニス中央ニ池アリ墨水ノ下流ヲ引ク者ナリ其広園ノ三分ノ一ヲ占ム中ニ二小嶋ヲ築ク細径ヲ以テ相連ル殆呂字状ヲ做ス蓋シ園ノ名ノ来ル所以坎池ヲ繞テ皆丘ナリ（トンダ欧陽脩）丘ノ上ハ縁草叢生シ中ニ小徑ヲ通ズ其間松楓桃李ヲ雜エ植ユ太ダ風致アリ（中略）嗚呼彼紅塵暗日ノ堤上ニ反シ此閑雅避世ノ遊地ヲ得誰カ一日飄ヲ携テ茲ニ一醉ヲ欲セザラン余ヤ是意アリテ遂ニ果サズ遺憾々々⁽³⁵⁾

この一文は「百花園記」という紀行文として見なされるであろう。百花園という名前の由来を説明するところに、王韜の「香港之名或以是歟」のようなフレーズが表れ、その景色を描くときに意識的に欧陽脩の『醉翁亭記』を真似ているのが明

らかなことである。このような綺麗などころで、同好の士と一緒に酒を飲んだりすることが出来なくて残念だと篤次郎は思った。篤次郎のあこがれた風景をドイツにいる森鷗外はスタルンベルヒ湖で満喫できた。そこで、篤次郎と同じく、森鷗外は漢文のテキストによって紀行文を記した。

漢文の知識において、日本の森鷗外、森篤次郎および中国の王韜たちは共有するところが多い。したがって森鷗外の『独逸日記』を分析するにあたって、明清才子佳人小説や『醉翁亭記』などの中日両国の知識人が共有する漢文テキストは看過できない。このような漢文のテキストを背景にして、『在徳記』という紀行文が綴られ、『在徳記』から『独逸日記』が書き替えられたのである。

七 『独逸日記』の風景とエロス

一八八四年十月から一八八八年七月の間、森鷗外は順にライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘンそしてベルリンという四つの都会に留学した。『表・一二』と『表・二三』を見ると分るが、『独逸日記』にはエロスと風景についての記述が殆ど前半の留学に集中している。就中、明治十九年十二月二十日の日記にはエロスと風景が揃っている記述がある。

後半の留学に入って、森鷗外自身が取り締まりの一人となり、公務のためにドイツに来ている上司石黒忠恵との付き合い、日本人留学生との間に起った面白くないことなどがあるため、前半の留学のように日曜日になると簡単に近郊へ旅する余裕はなくなった。ちなみにいうと、『独逸日記』のなかで森鷗外は日付の後に曜日はあまり書かなかったが、日曜日にはよく「日」あるいは「日曜」とつけ加えた。

篤次郎の手紙に書いてあるが、欧州に留学する日本人学生には勉強を疎かにして、ひたすら花柳社会に遊んでいる者が少なくなかった。そのような内容が森鷗外の『独逸日記』にもたくさん記述されている。カフェにいる娼婦と付き合うだけで

はなく、娼婦との間に子供が出来た留学生もいる。それは単に日本人留学生だけの問題ではなく、学生の全体からみても、娼婦と遊ぶ学生が少なくなかった。たとえば、森鷗外と意気投合したキルケは娼婦とつきあい、結局娼婦と結婚してしまつたという記述が『独逸日記』にある。

『独逸日記』の記述にかぎつていうと、森鷗外はあまり娼婦に興味を持たず、長崎の娼婦とドイツの娼婦の顔が「卑俗」なので人に厭な気を催させると述べている。それゆえに、ベルリンに入った後、森鷗外は僧房街という娼婦が群がっている所に引越した後でも、その生活と勉強はあまり影響されなかったのである。

森鷗外の個人生活より、『独逸日記』という紀行文のなかで娼婦、少女、貴婦人などがどのように描写されたのかは問題にするべきである。それについて「表一」に整理した例を見ながら論をすすめたい。

前述のように、森鷗外の留学は後半より前半の方が楽しかったようにみえる。特にスタルンベルヒ湖のあるミュンヘンに留学したとき、森鷗外は何篇かの紀行文を綴つたようである。明治十九年九月二日、森鷗外は三浦と一緒にスタルンベルヒ湖に行つて舟をうかべ、その後レオニイに行つて川下りをした。この旅を綴つた「那翁村ノ紀行」と「湖上ノ小記」を手紙とともに篤次郎に送つた。篤次郎はそれを読んで次のようなコメントをつけた。

三浦ト舟遊ノ佳什読去テ懷古友愛ノ情ヲ感ズ、微言ヲ容ラレ養神避塵ノ地ニ遊バルニ実ニ喜ブベシ那翁村ノ紀行田舎ノ模様写得テ妙柳北君ノ文ヲ読ガ如シ⁽³⁶⁾

紀行文に具体的にどのような田舎の模様が描かれたのかはともかく、森鷗外が成島柳北の『航西日乗』などの紀行文を真似ながら『航西日記』を記したのみならず、ドイツに留学している間、紀行文をよく記したのは確かなことである。

明治十九年九月二日のスタルンベルヒ湖の旅についても一つ強調したいのは、この旅で森鷗外が一気に漢詩を五首作つたということである。『在徳記』という紀行文にとって、漢詩は外見として必要なものであり、それが具体的に何を意味するのかということを詳しく論じる余裕はないが、齋藤希史の指摘によると、漢詩には人生の節目を意識させる役割があると

いうことである。⁽³⁷⁾

繰り返しになるが、独逸留学中に森鷗外は全部で十八首の漢詩を残した。古田島洋介注釈の『鷗外歴史文学集』（第十二卷）では、一一一番から一二八番までの漢詩がそれである。そのうちの一二二番から一二八番は「詠柏林婦人七絶句」である。それらを除いて、ほかの十一首の漢詩にはシュタルンベクと湖に関する漢詩（一一三番から一一七番まで）が五首ある。残り六首の漢詩には、軍医正になったときの漢詩（一一一番）、知り合いの子供の誕生日のときの漢詩（一一二番）ミюнヘンに行くときの漢詩（一一七番）などが含まれている。独逸留学中にあまり漢詩をつくらなかった森鷗外は人生の節目を意味するような最低限の漢詩を残した。そして、僅かな漢詩によって、『独逸日記』という紀行文の形を全うすることができた。それについて具体的な例を見ると齊藤希史の説がよく納得できよう。その訓読は前述した古田島洋介の注釈を参考とされたい。

① 書感

一片天書渡海来。千金何意買驚駘。自慙恩澤無由報。又拂牀頭卷帙埃。

② 寄萩原国手賀令息午生誕生

明治十七年二月。午日午時拳一兒。呼為午生真天造。嘉祥若此誰復疑。吾與乃翁相識久。稜々意氣老不衰。賢郎又曾寄小照。龍種早已現矯姿。君不見曰午曰馬乾之象。由來健行不敢遲。他年展足向何境。文耶武耶法耶醫。應比良驥奔千里。能紹其氣遂有誰。逢此嘉辰獻詩句。顧我驚劣獨自嗤。雖然諂諛丈夫媿。一語又須存箴規。聞說駕御術非一。莫忽緊縱得其宜。

③ 萬里離家一笈輕。鄉人相遇若為情。今日告別僧都酒。泣向春風落羽城。

かくして『在徳記』から書き換えられた『独逸日記』は従来の紀行文の外見と内実をそなえているが、王韜の『扶桑遊記』と同じく、具体的な言葉遣いにおいて『独逸日記』にも千篇一律なところがある。それによって森鷗外の漢文素養の高

さを物語っていると同時に、内容の空洞化を招致するところがなくもない。それについて詳しくは「表・三」を参考とされたい。

『独逸日記』では、Bravoを「壮哉」と、Klosterstrasseを「僧房街」と表記したことが示しているように、森鷗外は「ふたつの言語的世界を往復していた。ひとつは〈公〉のひとつとして生きるドイツ語の世界であり、同時に、その昼間の生を生きなおすための、〈私〉の文体としての漢文体の世界がある」³⁸。漢文体の世界が儒学共同体的な秩序の感覚と呼応して、独逸留学中の森鷗外にとって〈故郷〉のような存在であった。ドイツ留学中、弟の篤次郎との間にやりとりしていた手紙やドイツでの井上哲次郎との付き合いは、この漢文体の世界を織り成す主なものとして考えられる。³⁹ かかる背景のもとで、漢文の『在徳記』は記されたのである。

八 結びにかえて

以上はいわゆる漢文脈のなかで近代初期の中国人と日本人の渡欧日記に見出される紀行文の外見と内実の様式を考察してきた。一つの定義によって演繹するのではないので、直接的な論述より間接的な論述が多く為された。

明治時代の渡欧日記は、江戸中後期の知識人が長崎で「蘭館」と「唐館」をまわって残した紀行文とは違うし、大正時代に『朝鮮満州支那案内』と「日支周遊券」などを片手にもってオリエンタリズムの眼差しで満州、中国、台湾をまわった芥川龍之介や谷崎潤一郎たちの紀行文とも違っている。時代が下って、このような紀行文は書かれなくなり、漢詩、文言小説などとともにこの世から消失しつつあった。日本人にとって、その理由は単に漢文素養の衰退に関わるだけではなく、近代国民国家の建設のなかで、このような紀行文の形式が、日本国内からの「言文一致運動」と、西洋人のような他者によって問われつつ成り立ちがたくなった。

それにもかかわらず、今日のわれわれにとって、近代を再考するにあたって、この世から消失しつつあった紀行文を取り上げる必要がある。そもそも〈私〉のない〈公〉もありえないし、〈公〉のない〈私〉もありえず、〈公〉と〈私〉はつねに対の形で現れている。それと同じく、そもそも近代小説はなかったが、近代小説の誕生はこの世から消失しつつあった紀行文と内在的に関連している。それがまた〈公〉と〈私〉の関係のなかでさらなる考察が求められてくる。

東アジアの近代に、欧米からどのような文物知識を搬入されたのか、それによって近代化がいつから始まったのかなどの研究はもとより重要であるが、近代とはそれだけでは究明しつくされない。ハーバーマスが述べているように、近代にとって「新しい時代の意識が、そのつど古典古代に対する関係を通じて形成されるたびに」、「モデルン〔現代的〕という自己理解」が重要であり、過去と現代の緊張関係の中に近代が生きている。ハーバーマスの近代についての定義はとくに新しいものではなく、西洋ではT・S・エリオットの『伝統と個人の才能』、東アジアでは「述而不作」の極意を体得した顧炎武の「抄書」、森鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」などにおいて似ていることが考えられたからである。エリック・ホブズボウムによれば伝統は創られたものであるが、それにもかかわらず、今日のわれわれにとって伝統はそんなに簡単に切り捨てられるものでもなれば、またそんなに簡単に継承できるものでもない。

近代という全体の問題はともかく、近代小説の近代性を考えるには、小説そのものを分析するほかに、小説とこの世から消失した紀行文との内在的な関連についての考察がひとしお重要になってくる。近代を近代にしからしむる土壤がここにあるからである。

本論では、論の力点が紀行文の外見ではなく、紀行文の内実についての分析に置かれた。とはいえ紀行文の内実より、その外見の「散文＋韻文」が無視できるわけではない。このような外見をそなえる文学作品は紀行文に限らず、早くも西洋ではギリシャの演劇、旧約・新約の聖書、東洋では印度の仏教文学などに求められる。そして中国の『遊仙窟』と日本の『古事記』などの体裁は漢訳された印度仏教に負うところが大きい⁽⁴⁾。

尚、本論では散文は漢文であり韻文は漢詩を指す。齋藤希史の説をもって、紀行文にとって韻文の漢詩はどのような役割をもっているのかということを説明したが、紀行文のなかで、漢詩の役割はさらに散文と合わせて考察しなければその蘊奥を究めがたい。それについて、たとえば坂部恵が『かたり』の中で述べている〈かたり〉と〈うた〉の関係から考察すると問題がさらに複雑になってくる。

註

(1) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』作品社、一九九八年、一七〇頁。明治時代に活躍した新聞記者であり、評論家の福地櫻痴は「文章ノ進化」のなかに「文章ヲ書カンニハ支那文学ヲ修ムルノ緊要ハ、昔時ニ比ブレバ却テ一層ノ切ナル」、「一方ニ於テハ支那語ノ用ヲ繁クシナガラ、却テ一方ニ於テ其字ヲ廢セント議スルハ、是レ猶轅ヲ西シテ車ヲ東ニ行カシメント欲スルニ同ジカルベシ」と述べている。『明治文学全集11——福地櫻痴集』、筑摩書房、一九六六年、三七七頁、三七八頁。それによって、明治時代の言文一致運動は啓蒙者たちの思った通りに出来なかったということがわかる。

(2) 正岡子規『病床六尺』『子規全集』第八卷、一九二九年、改造社、三〇一頁。

(3) 眞壁仁『徳川後期の学問と政治』名古屋大学出版会、二〇〇七年、一三頁。

(4) 斎藤希史『漢文脈と近代日本』日本放送出版協会、二〇〇七年、四八頁。

(5) 本論では詳しく論じないが、東京にいる王韜は時間を割いて日本人のために漢詩を添削したことがある。そして、小野湖山たちにとって、自分の漢詩が王韜の『扶桑遊記』に収められるのが名誉であったのである。近代日本の漢詩文の世界に対して、王韜は黄遵憲や俞樾と似た役割を果たしたといえる。

(6) 古代中国では旅を記述することを意味する「行記」という言葉がある。宋の黄徹『鞏溪詩話』に「醴陽道傍有甘泉寺、因葉公・丁謂曾留行記、從而題詠者甚衆、碑牌滿屋」とある。『醴陽ノ道傍ニ甘泉寺アリ、葉公・丁謂曾テ行記ヲ留ムルニ因リテ、從而題詠スル者甚衆シ、碑牌屋ニ滿ツ』また道程を意味する「行紀」という言葉がある。唐の司空圖「江行」に「行紀添新夢、羈愁甚往年。何時京洛路、馬上見人煙」とある。『行紀ニ新夢添ヒ、羈愁往年ヨリ甚シ。何レノ時カ京洛ノ路、馬上人煙ヲ見シ』羅竹風編『漢語大辞典』（縮印本）上海辞書出版社、二〇〇七年、一八二六頁と一八二五頁。「行紀」が旅を記述するのは近代に入った後のことである。たとえば一九一〇年の『東方雜誌』に「行紀」というコラムが設置されたが、しかし長くは続かなかった。この言葉は「幹部」などの日本語式の漢語と同じく、近代中国人留学生によって日本から輸入されたものであるかどうか、そうだとすると「紹介」のような言葉と同じく現代

中国語に土着できるかどうかは、他の研究に委ねたいが、それが意味している内容は古代中国語の「行記」や日本語の「紀行」などと同じである。

- (7) 深沢徹『自己言及テキストの系譜学』森話社、二〇〇二年、七〇頁。
- (8) 成島柳北『航西日乗』『明治文学全集 4』成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲 筑摩書房、一九六九年、一一九—一二〇頁。王韜『漫遊隨錄』『走向世界叢書』第六卷、岳麓書社、二〇〇八年、七一頁。
- (9) 斌椿『乘槎筆記』『走向世界叢書』第六卷、岳麓書社、二〇〇八年、九八—九九頁。
- (10) 王韜『漫遊隨錄』七三—七四頁。
- (11) 成島柳北『航西日乗』一一九頁。
- (12) 森鷗外『航西日記』『鷗外全集』、第三十五卷、岩波書店、一九七五年、七八頁。
- (13) 平川祐弘『和魂洋才の系譜』河出書房新社、一九七一年、五五頁。
- (14) 王韜『香港略記』『弢園文新編』錢鐘書編、三聯書店、一九九八年、九六頁。この文章のためにこのような注が書かれている。「又有說「香港」得名於明代在此出運「莞香」、屈大均『廣東新語』有「莞香」記載。此說更流行、較切實」とあるが、これも「香」という字面に止まっている説だといわざるをえない。
- (15) 森鷗外『航西日記』七六頁。
- (16) 梁啓超『夏威夷遊記』『飲水室文集』吳松他点校、雲南教育出版社、一八二四頁。
- (17) 周作人『日記與尺牘』『周作人自選集——雨天的書』河北教育出版社、二〇〇二年、十二頁。
- (18) 梁啓超『夏威夷遊記』一八二六—一八二七頁参照。
- (19) 梁啓超『夏威夷遊記』一八三三頁。
- (20) 王韜『弢園著述總目』『弢園文新編』三七六頁。
- (21) 木下彪『明治詩話』文中堂、一九四三年、三三二頁。
- (22) 柯文 (Cohen Paul A.)『在傳統與現代性之間』雷頤・羅檢秋訳、江蘇人民出版社、一九九四年。
- (23) 王韜『扶桑遊記』『走向世界叢書』第三卷、岳麓書社、二〇〇八年、四一七頁。
- (24) 王韜『扶桑遊記』四五二頁。
- (25) 文政元年、頼山陽は九州に向って西遊の旅をした。この旅は頼山陽にとって長崎の丸山の夜々と耶麻溪の景色が魅力的であったであろう。石橋忍月の史伝『文豪の鞋痕』『石橋忍月全集 補卷』八木書店、一九九六年。
- (26) 王韜『扶桑遊記』四四五頁。
- (27) 王韜『扶桑遊記』四五九頁。
- (28) 王韜『扶桑遊記』四九六頁。

- (29) 王韜『扶桑遊記』四六〇頁。
- (30) 前田愛「柳北『航西日乗』の原型」『近代日本の文学空間』平凡社、二〇〇四年、八八頁。
- (31) 小堀桂一郎は『若き日の森鷗外』の中で佐藤春夫の論を引いて、『独逸日記』は「たとえ近代日本文学誕生の紀元とまでは言わないにせよ、これがすなわち文学者森鷗外の開始であった」と指摘した一方、論の中心が『独逸日記』を史料として森鷗外の独逸留学生活を考証するにかたより、文学作品としての『独逸日記』についての分析がないといわざるをえない。そして『独逸日記』につけ落とされた内容を強調はしたが、『在徳記』から浄写される途中に増やされた内容はあまり指摘しなかった。小堀桂一郎『若き日の森鷗外』東京大学出版会、一九六九年、二〇頁。
- (32) 古田島洋介注釈『鷗外歴史文学集』第十二巻、岩波書店、二〇〇〇年、二七九頁と二九一頁。
- (33) 稲垣達郎編『日本からの手紙』日本近代文学館、一九八三年、三頁。
- (34) 稲垣達郎編『日本からの手紙』二二―二三頁。
- (35) 稲垣達郎編『日本からの手紙』一七頁。
- (36) 稲垣達郎編『日本からの手紙』五五頁と六四頁。小堀桂一郎は『若き日の森鷗外』の中で指摘した森鷗外が頻繁にシュタルンベルヒの湖畔に遊んだこと、そして『航西日記』にくらべて『独逸日記』は記録された漢詩の数はあまりすくないことについて、本稿では漢文紀行文の性格から捉え直してみたい。森鷗外は三浦の死に当たって草した漢文の弔辞『告亡友三浦子文』にはドイツ留学中の舟遊びに触れなかったが、木下川での「探梅」を綴った。それによって森鷗外の文人趣味を伺うことができよう。小堀桂一郎『若き日の森鷗外』、六八―六九頁、九二頁、一〇頁。
- (37) 斉藤希史『漢文脈と近代日本』一七六頁。
- (38) 三好行雄「妄想 漢文の地底」『森鷗外・夏目漱石』『三好行雄著作集』（第二巻）、筑摩書房、一九九三年、八三頁。
- (39) 『独逸日記』には井上哲次郎の名前が頻繁に出ている。井上哲次郎は森鷗外のために『盗侠行』を添削したり、評語を書いたりし、また戯れに森鷗外にゲーテの『ファスト』を漢詩体で訳すことを頼んだ。森鷗外は漢詩体で『ファスト』を訳しなかったが、日本に帰朝した後、いち早く西洋の抒情詩を漢詩訳して『於面影』という詩集を編纂した。
- (40) J. ハーバースマス『近代 未完のプロジェクト』三島憲一編訳、岩波現代文庫、二〇〇〇年、八頁。
- (41) 神田秀夫の「文体——詩句と散文との双在するもの」を参照されたい。中島健蔵他著『比較文学——日本文学を中心にして——』矢島書房、一九五三年。

[表 - 一] 王韜『扶桑遊記』からの例文

番号	例 文	頁
1	窈窕佳人慣折腰，已看裝束十分嬌，只教司茗不司酒，遣與王郎伴寂寥。	413-414
2	小鐵聞言意轉悲。珠喉抑塞歌聲遲。	417
3	自買解語花外，則惟沽酒以消愁耳。	417
4	管領鶯花十萬人，卻教盲史演遺聞，座中豈有樊川在？怕發狂言乞紫雲。	421
5	莫怪王郎太有情，相逢只是說流鶯，樂天老去樊川謫，尚得天涯薄幸名。	426
6	其欣身玉立、媚眼流波者，則阿濱也。珠喉乍囀，響遏行雲者，則阿清也。有谷哈那者，年僅十五齡，如流鶯之出谷，作飛燕之依人，獻媚爭妍，並皆佳妙，固屬柳橋一時之秀。	426
7	東來日日看花醉，身入花叢屢回顧，欲效司勳乞紫雲，不信樂天放樊素。	429
8	清癯綽約，善解人意者，則桃子也。豐腴秀碩而作飛燕依人者，則美吉，若吉也，年齒尚稚而意態流逸者，則信吉也。	434
9	美人窈窕多容光，歌聲欲遏流雲駛。	437
1 0	池上水樹扶疏，涼翠欲滴。當壚女子，媚眼流波，態度綽約。	456
1 1	弦韻咽水，歌聲遏雲，而舞影婆娑，獨在燭光迷離之下，諸君皆爲罄無數爵。	460
1 2	小鐵，余舊好也，不見一月有餘，靦腆掩抑之態，猶復可掬。弦韻既調，歌聲齊發，直覺飛泉為咽，行雲不流。須臾，名月一輪湧于江中，圓如玉盤，皎若冰盆，清輝朗徹，四無纖翳，風景之妙，未有如斯者也。不覺急呼快甚，共浮大白。	461-462
1 3	姊妹花開並擅名。風流才調果傾城。秋波無限銷魂處，媚眼天生百種情。	467
1 4	小勝亦來，彼歌此舞，借以侑觴，諸人皆罄無算爵。歸舟涼甚，一路電光送紫，月影隨波，殊覺快意。	477

[表 - 二] 森鷗外『独逸日記』からの例文 (一)

番号	例 文	頁
1	シユワアベ氏は美貌の少女なり。其語を聞けば、口吻丈夫に似たり。	94
2	ウユルツレルの姉妹、年十五六、秀眉紅頬の可憐児なり。	95
3	此日英国婦人ステンフォオス氏 Miss Stainforth 余等の午餐夥伴に入る。年十七八。嬌眸濃眉にして其髪深黒なり。	103
4	スネットゲルは瘦小敏慧にして雄辯人を驚かす。ワルテル氏は紅顔豊頬亦言語に善し。然れども眉目甚だ美ならず。バアゼル氏は寡言にして沉静、婉柔愛す可し。	105
5	顧視すれば十五六の少女馬車の上に在り。紅頬碧眼、嫣然として笑ひて曰く。君が帽甚だ美なり。請ふ児をして熟視せしめよと。余笑ひて之を諾す。	109
6	長崎娼婦の写影を示す。一坐其美を劇賞す。之を見るに、容貌艶麗なりと雖、卑俗の氣鼻を襲ふ。	118
7	婦人中最も美なるはエエルス夫人なり。漆黒の髪、雪白の膚、巨眼隆準、尤物と称すべし。顴は微しく出でたり。然ども疵痕と為すに足らず。	120
8	一雙の嬌眸能く落第の才子 (Heinrich) を鑒識し、月桂を贈りて詩巻を求むる処、余をして數行の涙を墮さしめたり。此夜純白の衣を着け、花束を手にして出づ。嬌姿比なし。若し夫れヂヤコモ氏 Fr.L.Diacomo は紅臉を呈し、美ならずと云ふに非ず、唯、桃紅の李白に於ける觀を為すのみ。	125
9	キイサンドは絶だ嬌小、明眸皓齒、姿態羞を帯ぶる者の如し。唱歌を善くす。曰く。妾頃日始て「ファウスト」を読むことを許さると。	128
1 0	会散じて国民骨喜店 Café National に至る。娼婦の濃妝して客を待つ者其数を知らず。其中或は妖艶人を動かす者なきに非ず。然れども其面貌に一種厭ふ可き態あり。名状すべからずと雖、一見して其の娼婦たるを知る。蓋し売笑は社会の病なり。而して此病は青樓の禁を得て除く所にあらず。	130
1 1	ホヨオブレル余と日本の風俗を談ず。其婦白皙頗美なり。此夜主婦を延いて食卓に至り、其傍に坐す。	131
1 2	一等軍医エエベル、ワアルベルヒと同じく大学生連合会「バワリヤ」 Bavaria に赴く。後「コロツセウム」 Colosseum に至る。倡優ありて技を奏す。卑俗見るに足らず。	136
1 3	夜加藤余を伴ひて曲馬場に至る。ベルンハルヂイネ Bernhardine Nicolaisen といふ少女、技は甚だ拙けれども、年齒十五六、嬌姿人を悩ませり。	150-151
1 4	シエツフェル Scheffel の詩 Lied der Margaretha を唱へたる女優、音調最美、容色も人に超えたり。	173

[表 - 三] 森鷗外『独逸日記』からの例文 (二)

番号	例 文	頁
1	明治十九年四月十八日。午前六時家を出で、汽車に上りてスタルンベルヒ Starnberg に至る。地スタルンベルヒ湖 Starnbergersee oder Wuermsee に臨む。此より歩してアンデツクスに抵る。村を過ぐるごと四五。路傍耶蘇磔柱の像多し。村民加特力教を奉ずるに因るなり。行くこと三時間アンデツクスの丘に達す。丘湖に臨む。アムメル湖 Ammersee と名づく。(中略) 生徒等皆狂歌す。興を尽して帰る。	138
2	明治十九年六月六日。此より先き湖上の光景を見るに、水天一碧、時に丘陵の眼界を遮るあり。近岸の処は流光水に漾ひ、一幅の画図の如くなり。	141
3	明治十九年九月二日。三浦とスタルンベルヒに遊ぶ。舟を泛ぶ。	148
4	明治十九年十月二十三日。加藤の発意にてスタルンベルヒ湖に遊ぶ。旧酒亭をレオニイ村に訪ふ。秋色満目、墜葉路を蔽ひ、夏日の綺羅場と同じとは思はれず。	153
5	明治十九年十一月十三日。丹波敬三ブダペスト Budapest に往きし帰途此に立ち寄り、此日土曜に当るを以て、余等を誘ひてレオニイに遊ぶ。汽車のスタルンベルヒに達するや、馬車二輛を雇ひ、湖を環りてレオニイに至る。酒を呼びて興を尽くし、此に泊す。	154
6	明治十九年十二月二十日。店を出で、マクシミリヤン橋上よりイザアルの下流を望む。稠霧枯林を鎖し、深緑の水其間を流るゝさま、一幅の画図の若し。寒を忍びて佇立する者多時。カル、門 Karlsthor を過ぐ。一少女ありて後より余を呼ぶ。顧視すれば嘗てフィンステルワルデルの咖啡店にありて日本人を品評したるアンナなり。曰く今カル、門骨喜店 Café Karlsthor に在り。請ふらくは暇時来り訪へと。	157
7	コツホ師諸生を導きてストララウ Stralau に至る。水道の源を観る。余北里、隈川等と與る。帰途ルムメルスブルヒ Rummelsburg に至る。地小湖に枕む。景致愛す可し。一群の遊人あり。男女相半す。迷藏の戲を為す。傍若無人。余儕呆然たり。	164
8	明治二十年九月十七日。起ちて客窓を啓けば、城達 Schlossplatz の苑、緑樹露を帶び、秋花香を吐く。快比なし。	171